



随

想

## 穂高蒼空

小山義美

七月末、槍と穂高から帰るとすぐ入院してしまった。外科手術をするためだったが退院後の通院も終るころ、またまた咽喉科と歯科に通い、しばしば心臓の凍る思いをするほど苦しんだ。やがて夏の休暇も終る。まるでこの夏は病気のための休暇のようだった。「これがほんとうの山の神の祟

りだ」見舞客の一人はひやかすし、「誰でも気だけは若いんでね」と暗に登山年輪はすでに過ぎたとばかりほのめかす者もいた。歯の痛みに一晩まんじりともしなかった夜など、真剣に「俺はもう山など無理かもしれない」とひそかに思ったりした。年に何十日かを山とスキーで過ごす私にとって、仮りにこのような想像は悲劇以外の何ものでもなかった。何十年間、山を愛しつづけてきた私には、山はも早他人ではなくなっている。私は決して登山家でもなし、高名なスキーヤーでもない。しかも「俺たちや街には住めないからに」というあの感傷的な一節に浮かれる年でもないのだが。

暑かった日々の療養のあいま、つれづれなるままに山の本ばかり読んだ。その中でジョン・ハントのエヴェレスト登頂記と、モーリス・エルゾーグのアンナプルナ登頂は感銘深いものだった。彼等は共通して、登頂の成功は、すべて友情とチームワークの結果だと説明している。そしてさらに彼らは「日常の生活の中に、その頂上に登らねばならないエヴェレストはいくつもあ

る」し「人間の生活には、他のアンナプルナもある」と結んでいる。ハントやエルゾーグは生命をかけた冒険から人生のかけがえのない貴重な体験を得たのである。私たちはこれらの意味するものを真に理解することはむづかしい。しかしただ一つまちがいないしいえることは、彼らの苦闘の物語りを支えるものは、孤独とのすさまじい闘いであつたということだ。山は根源において人間に孤独を強いる。重いザツクを背にして黙々とひたすら登ってゆく山男たちの苦しみは、自らの精神と肉体の限界に対するあくなき挑戦なのである。他人の介在を許さないこの孤独の闘いに堪え得る者だけが、友情とチーム・ワークを讃美することができるだろう。

私は北穂小屋からみる滝谷ドームに「氷壁」の魚津恭太の孤独な死をしばしば思いおこした。涸沢岳から出る無名尾根は限りなく静かなりと書き遺した。もちろん魚津は作中の登山家であり、彼のもつ幻影は詩的である。しかし作者は強いて、魚津の遭難に詩情を表現しようとは考えなかったろう。むしろせんせいな作家の魂は、山と孤

独と詩情の結びつきが、極めて必然的なものと感じたからではなかったか。これは私の個人的な感情かもしれぬ。たといそうであったとしても、私はそれ故に山を愛してきた。すぐれた登山家には、もつと多くのエヴェレストやアンナプルナがあるように、私は私なりの詩を山に求めつづけるであらう。

(文学部講師・美学)

## 新聞漫談

新井 清

戦後の国語の混乱を反映してか、近ごろの新聞の文章や用語の中には、これはどうかと思われものがよく目につく。とくに「送りガナク」などまちまちで、新聞によつてちがったりしているのだから問題だ。その上、これを書いている戦後の記者は、学生時代、横文字それも日常会話あたりには比較的熱心であつても、国語の授業はあまり受けていないし、文章を書く訓練もなお

ざりにされているせいもあつて、書かれた記事が、文々の体裁をなしていないことがよくある。一般的にいって、文章がたいへん長かったり、主語が行方不明の場合や、能動体がいつの間にか受動体になっていたりする。最近よく目につくのに、名詞で終わる表現がある。たとえば、オリンピックの記念切手売出しの記事で「夜明けまでに何人か行列。人気は上々。六時ごろからはゴツタがえして郵便局長ら幹部が繰出。……」とつづく。こんな書き方は、ひとつくらしいだと簡潔で、読む人に訴えるところもあるだろうが、三つも四つもつづいては、読む人にかえつて舌足らずの感じを与えないだろうか。初夏のころ、とくに暑いと「この暑さは本年最高」とくる。八月までにだんだん暑くなるのだから、これじゃ毎日のように本年最高と書かねばならぬことになる。油送車ということばがある。もともと油槽車だったのが、槽という字がなくなつたので、同じ発音の送をあてたものだが、これなら送油車とすべきである。油送では日本語にならない。またアツツ島の戦跡を遺家族が訪問というように書かれ

る。これは戦時中、出征して戦死した人の遺族と、出征して元気に働いている人の家族とを、ひつくるめた表現なのだが、遺族と遺家族と同じものだと思つている記者も案外多い。体刑という文字もよく紙面に見られる。「懲役〇年の体刑」などという。だが体刑というのは、直接人体に加えられる刑罰である。ムチでたたいたり、ノコギリでからだを引いたりする刑罰で、昔はあつたが、現在そんなむごたらしい刑罰はない。犯人は刑務所などへ収容して、自由を拘束する刑罰で、正しくは自由刑といわねばならない。しかし、このことばはいささかピツタリしないものがある。刑罰をうけるのが自由で、いやなら受けなくてもいいというふうな印象も与える。だから新聞では体刑といふ書くのだろうが、これなどは懲役刑とか禁錮刑といった表現の方が読者には親切である。またとくに最近ほとんどない流行語がはらんして、ことばの正しい使い方の理解が妨げられているのは、注意せねばならない。流行語には、生まれるべくして生まれた風刺的なものや、軽妙なものも、たしかにある。だが国語の訓練

において欠けており、ひいて思考の手段であることばの力という点で、いま一步という若い人が、自分では軽妙とも何とも意識せず、口をついて出たことばが、かえって舌足らずの表現の故に、人からおもしろがられて流行語として、もてはやされているものもあるとすれば、日常紙面制作に携わっているわれわれは、大いに反省せねばならないことだろう。

(毎日新聞中部本社編集局長)

## 学生増募の問題

辻 本金 治

文部省ではいま四〇年・四一年度の大学志願者の激増を予定して、懸命にその対策を練っている。だがお役所というものはまことに困ったもので、とかく数字だけを重大視して物の根本を考えないきらいがある。一体、現在の学生で、およそ学問をする素質のある者が何割あるのだろうか。更

にいえば、実直に勉強をしようという覚悟をもって入って来た者がどの位あるのだろうか。事實は——これは極端な話かも知れないけれど、多数の学生の中には、大学は何とか切り抜けて卒業の資格さえ貰えばいいと考えている者がかなりあるらしい。だから講義の方はさっぱり出ないでアルバイトで遊びの金を作つたり、麻雀やパチンコや、はては放埒なグループ遊びに貴重な青春を浪費し、試験になると、友人のノートやプリントの講義録などで一夜づけ、もつとひどいのは初めからカンニングを予定しているのがある。語学の方はそうは行かないので、何年もためておいたあげく、普段サボっていることなど棚に上げて、試験のあと自宅訪問で泣き落しを試みる。こんなことをいうと、それは恐らくよほど質の悪い大学のことだろうと思う人があるかも知れないが、一流を以て誇る関西のある国立大学においてさえ、毎年教養部の落第や仮及第が極めて多数出ること、カンニングが甚だ多いことなどこの実態を雄弁に物語っているではないか。

さて、以前どこかで見たのだが、国立大

学では学生一人について一カ年約十二万円余の経費が要るそうである。授業料を年額一万円とすると、実にその十倍以上である。十一万円は国家が負担していることになる。この事柄は、当面の問題を考える時に忘れてはならない重大なポイントである。普段、国民がしぼり取られている税金を使うことしか考えていないお役人共はこんなことをあまり気にしていないのだが、先に述べたごとく殆ど勉強しない学生がどの大学にも相当数いるのだから、日本全体では相当多額の大切な国費をむだ費いしていることになるわけだ。国立の学生を増募するなんてことは以ての外、むしろ嚴重な国家試験でも行なって資格者を厳選し、その合格者のみ改めて入試をうけさせるようにすべきである。工場方面に理工科の技術者が多数必要なら、現在各地で設立している工専で十分用を足すであらう。技術者というものは全部必ずしも大学の学問を必要としないのである。

一方、文部省の計画では、志願者の大部分を私立大学に引うけさせるつもりの方である。しかし、僅かばかりのお金を、し

かも補助金でなしに貸与金として出すこと  
によって、現在でもすぐに行き詰りつつあ  
る私大経営になお過大な負担をかけようと  
するのは全く以て虫のよい話といわざるを  
得ない。私大の現状は、最も優秀な所でさ  
え、施設は先ず先ずといったところだが、  
教員組織や授業内容では何とくしてやつと  
普通の程度を維持しているに過ぎない。二  
流以下では随分ひどいものがある。とても  
莫大な費用をまかない切れないのである。  
にも拘らず、国が今の計画を実行するとす  
れば、ひどい所では苦しませられに劣悪な学  
生を多数受入れて、粗雑な教育を行なうこ  
とになりかねない。(上記国立大学での計算  
でも分るように、大学では学生数が増えれ  
ば当然赤字が増大する元なのである。)私大  
はその良心まで犠牲にして、文部省の要請  
に応じねばならない義理あいは毫もない。  
同志社はむしろこの機会に、国からの財政  
援助を当然の権利として要求し、一方入学  
者を厳選して、その質の向上を計るべきで  
はなからうか。(文学部教授・ドイツ文学)

## アジアとはなにか

吉田 恵

日本は、アジアでは、ただ一つの近代国  
家である、などと、妙なほめられ方をする  
ことがある。かと思うと、アジアの一員で  
あるにもかかわらず……、などと、嫌味を  
言われることもある。

いったい、アジアとは、なにか。

アジアという言葉の意味は、よく  
は判っていない。ある学者によると、どう  
やら、アッシリア人が、太陽が昇ることを、  
そう言っていたらしい、とのことである。

地域の名前としては、いわゆる古典時代  
のギリシャ人が、エーゲ海よりも東の方、  
とくに、そのころのペルシャの領土一帯を  
さすのに、この言葉を使っていた。やがて、  
ヨーロッパの、外への伸びにつれて、そこ  
から見て東の方向に当たる地域全体が、こ  
の名前で呼ばれるようになっていった。

一方、この地域の側から見れば、これを  
一つの名前で呼ぶための理由は、まったく  
見当たらない。

地理的には、この地域は、ヨーロッパと  
地続きであって、どこに境目があるのか、  
さっぱり見分けが付かない。アフリカとも  
地続きであるが、こちらとの間には、かな  
りのくびれがあるので、一心、そこに線を  
引くことができる。

歴史的に見ても、この地域をほかの地域  
と分かち、全体に共通な要素は、一つもな  
い。

たとえば、日本人や中国人は、黄色人種  
であり、インド人やアラビア人は、白色人  
種である。日本語と中国語は、べつべつの  
言語家族に属している。宗教は、高級なも  
のに限っても、仏教とイスラム教とユダヤ  
教があり、さらに、いったん出ていったキ  
リスト教も、はいってきている。しかも、  
一つの宗教が地域全体を支配したことは、  
一度もない。

この地域には、資本主義国の植民地であ  
ったことのある国が、わりに多い。したが  
って、そうでない部分もあるわけである。

これに当たるものとしては、たとえば日本と中国とシベリアを、それぞれ別の意味で挙げる事ができる。もともと、中国は全面的には、これに当たらない。

要するに、アジアという観念は、ヨーロッパの立ち場からきわめて便宜的に作り出されたしるものに過ぎない。ラテン語の、東に昇る太陽、を意味する言葉まで遡るオリエント（東洋）についても、同じことが言える。

ヨーロッパは、見方によっては、いまなお一つであるかも知れない。アジアは、いまだかつて、一つであったことがない。

現在、世界の国々には、たがいに誤解しあっている。そして、このことは、のっぴきならぬ利害の対立は別として、国々の中のイザコザのおもな原因になっている。ところで、この誤解には、すでに意味を失ってしまったている、古ぼけた観念から来ているものが、少くない。今日、日本が世界と自分をより少く誤解するために、なによりもまず必要なことの一つは、アジアという観念をあっさり捨て去ることである。もちろん、ほかの国々にとっても、

ことは、同じである。(文学部教授・中国文学)

## 同志社の学燈

海原 裕 昭

いまから八年前に同志社を去って異郷の地に赴くことになった私は、出発する日の前夜、万感の思いをこめて同志社の庭を遺したものである。いつまた再会することができるか予測もしえない母校の面影を胸中に刻みつけたかったのである。実をいえば、もし私が学部を卒業するだけであったとすれば、それほど同志社に愛着を感じることはなかったであろう。学部時代の私は、少なからず同志社の現実に疑問を抱いていた。落ち着いて自分の研究を進展させていくことができるような環境でもなかったし、もちろん先生方との学問的・人格的接触が得られるような場でもなかった。いわゆる官学では期待しえない自由な空気を吸いながら、よりよく生きるための道具としての学問を身につけたかった私は、ともす

れば勉学への意欲を曇らせることがあったのである。その頃の私には、とても母校愛などというものはなかったといってもよい。

私は学部を卒業すると、ためらうことなく大学院を受験した。学部では満足できなかった勉学の場を大学院に求めたのである。このような私の願いは、早々に果たされた。大学院は、私にとって理想郷であった。なるほど研究設備は充分でなかったし、研究資料もそれほど準備されているわけではなかった。あるいは大学院は、同志社においてもっとも疎外された部分であるかも知れなかった。だが、同志社の学燈は、大学院において赤々と燃やされていたのである。私は、そこで漸く学問への眼を開かれたのであった。そこには何よりも先生方との直接の学問的・人格的接触を通じて自分の勉強を深めてゆくことができる条件と環境があった。私は、こうした場においてはじめて学問との感動的な出会いを経験したのである。明徳館の壁に刻まれた『真理は汝を自由にする』ということばが生き生きとよみがえってくるのを覚えたのも、そのときである。静かに湧きあがってくるこの

喜びは、次第に同志社へのヒューマンな愛着となってあらわれた。

私は、いまでもマンモス大学が大学の墮落であるとは考えていない。多くの真摯な学生をもち、多くの優秀な教授陣を揃え、全学をあげて険しい学問の峰を踏破しようとしている大学は、それ自体ひとつの偉容である。ただ、問題は、果してそのような態勢が全学的な規模において整えられているかどうかにあるといえる。たしかに、野山の同志社もよいし、登山の同志社もよい。しかし、何といっても△学問の同志社▽でなければ、学校としては致命的なのである。同志社の学燈が良心的な研究者によって与えられていることを思うとき、同志社の発展が実は教育機関としてよりも研究機関としての成長にかかっていることを知ってほしい。というのも、地方の遠い大学にあって、同志社とは比較にならない劣悪な研究条件のもとで孤独な戦いを続けている私は同志社に育った者として母校の学問的レベルが全学的に一段と高められることを心の励ましとしたのである。

(校友・高知県立大助教授)

## 地と水と空

田代 晃二

生前の父に連れられて行ったとき、三十年ぶりの墓詣り。大学生の長男と高校生の長女とをつれて、福島県白河市まで出かけた。ジャーナリストの悲しき、第一線時代はまとまった休暇が得られぬまま今日に至ったのだが、子どもから言い出したのをいい機会と、決心した。年々のつけとどけはしてきたものの、子どもたちを失望させない状態にあるだろうか？ 打診の手紙を出したところ「お待ちします」と返事がきた。三十年前のおぼろな記憶。当時とは位置がちがっている感があったが、見覚えのある数基の墓が、寺側心づくしの、数々の花に飾られており、ほっとした。子どもたちも、本堂からいただいてきたソトバを立てて、神妙に手を合せた。

墓詣りだけの殊勝な心がけて親父を誘っ

たのでもなろうし、こちらにも、ふだんじっくり話し合う機会のすくない申しわけなきを感じていた際なので、父子の夏期ゼミナールの好機会と思い、盤梯高原まで足を伸ばすことにした。

檜原湖の高原ホテルへ荷物を置いて、身軽になって、五色湖を廻る。千年前と、明治二十五年と、二度の大爆発で、川がせきとめられ、大小二百の湖沼ができたのだという。

へいま鳴いている鳥は？ ……オールリだよ！ あっちで鳴いたのは？ ……シジュウーガラだ！ 声の大きな鳥は高い木にしか来ない、そのわけは？ ……一日のうちでよく鳴く時間は？ 野鳥は一日何食だと思う？ ……√

おとなしく聞いていたようだが、授業料をはらわれない講義だからと、聞き流していたのかも知れない。夕日にはにかむ盤梯の頂を、涼しい高原の緑に身を埋めて望む美しさは格別だった。

翌朝、高原からさらに北へ、吾妻スカイラインを観光バスで行く。標高平均一、四〇〇といえ、比叡山の倍近い。肝を冷や

すイナズマ型の登り降り。ようやく運を天に任せる境地になったころ、途中停車で一眼させてもらった、硫黄くさい平原が、なんと八淨土平<sup>じやうどらへい</sup>！

福島まで、たっぷり四時間のドライブは雄大な景色と涼しさに満足。

父の血圧を心配して、終始スートケースを持ってくれた長男をねぎらってビールで乾杯。八成人の日にはまだひと月足らんな？ ヲハイ、でも、前夜祭ということがありますから……さ、お父さん、つきましよう！

(NHK大阪中央放送局審査室主査・文学部講師)

## 子供たち

イルゼ・ブラッシ

今は一昔と言いますか時は流れ三人の娘も成長し、長女だけが日本に残り、次女、三女(双児)はアメリカとヨーロッパにそれぞれ住んでいます、昨年、出版社の依頼

を受け、再度海外に出る機会に恵まれ、東南アジアから中近東を経てヨーロッパに入り、スイスにいる三女と三年ぶりに再会しました。二人でヨーロッパ各地を約一ヵ月旅行し、リスボンで別れを惜しみつつアメリカに向いました。フィラデルフィアの空港には羽田を発った長女が同日二時間前に到着しており、また出迎えにきた次女夫婦と三年の間に大きくなった孫娘らと再会のよろこびを分か合いながら、朝には三女と別れ、九時間後には長女次女に会えるなんて、地球はまるで自分の手のひらでぐるぐるまわしているような錯覚を覚えます。

二女は孫に今の時代には数カ語が話せるようにと、自分の娘に決してアメリカ語を使わないで日本語ばかりで話している、夫の家族などが来てマリ、チヨチヨ(蝶々)とか、カエル等の日本語を覚えて帰える状態だったので、夏になって外に出て近所の子供たちと遊ぶようになって、急に一言も日本語を話さなくなったことをとも残念がって、孫に無理におばあちゃまと言わせ、「おばあちゃまと言ってあげないと、おばあちゃまは日本に帰えっておしまいに

なりますよ」と言い聞かせたとたん、泣き出しそうな顔をして、パンチャンと言った時にはこちらが涙がこぼれさうになりました。三女もスイスに住む関係上、ドイツ語、英語、フランス語で大変苦労しているようでございます。

その昔、黒谷の山からてくてくと歩いて御所の中を抜け、五年間通いなれた道も今では電車道も開け、私が子供の頃歩いたあれだけの半分の道もすべて乗りもので通り過ぎるスピードの時代にはなかなか得がたいことも沢山有りますが、御所の庭の四季のうつり変わりの美しさや加茂川の水の流れのおだやかさ等、本当に遠い過去となりました。私にはいつも思い出されるのは校庭で友と四つ葉のクローバをさがしたあの頃のなつかしい思い出ばかりです。そのクローバも今では校舎が立派に建ち並び草の繁みも少なくなったことでしょう。世界が小さくなったため日本語だけの世話から数カ国語を学ばねばならない現代には本当にクローバの四つ葉をさがすだけの余裕がほしいものです。

(昭和三女学校卒・手芸デザイナー)